

月日 2021年10月28日(木)

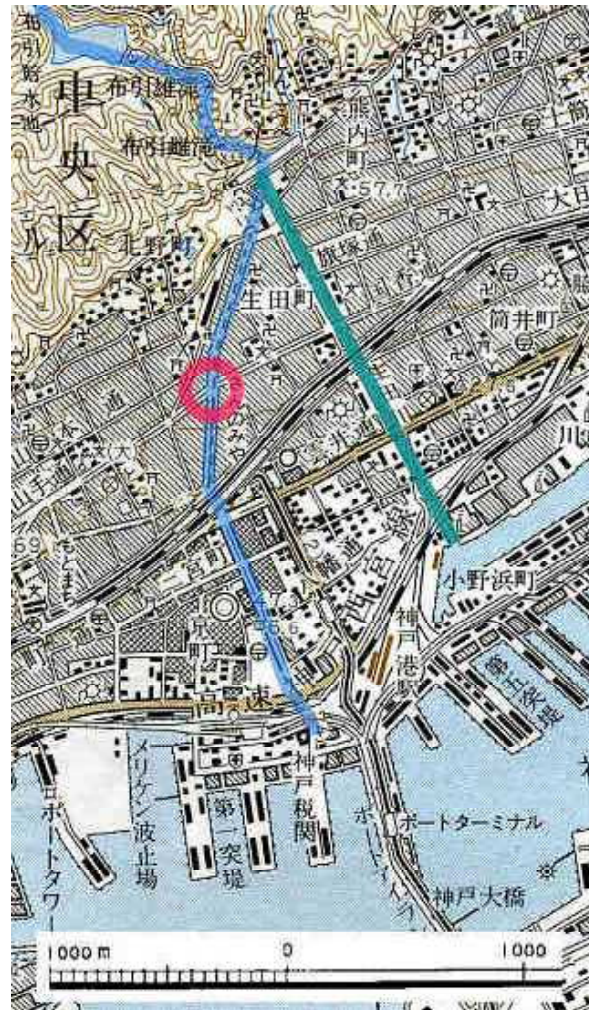
集合 10時30分神戸市営地下鉄「新神戸駅」北改札口

《行程に沿って》

①生田川 新神戸駅の建物の下を生田川が流れている。上流には布引の滝・五本松堰堤(布引ダム)の目的地がある。下流はほぼ直線で小野浜に流れ込んでいる(左地図の緑色部分)。

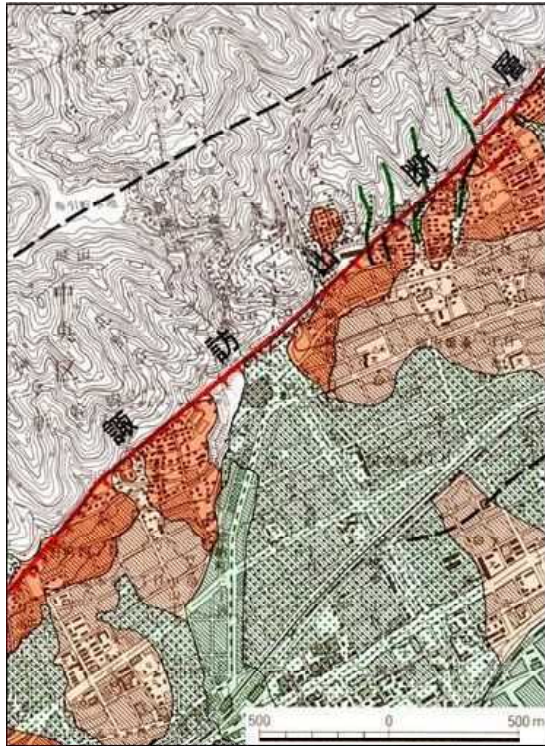
この下流部分は、1871(明治4)年に付け替えられた所。

旧生田川は地図の水色部分。旧生田川は市街地部分では天井川となっていて、頻繁に浸水や土砂災害を起こしていた。東西交通の確保(天井川の解消)と、開港に伴って整備された外国人居留地への災害を避けるためであった。

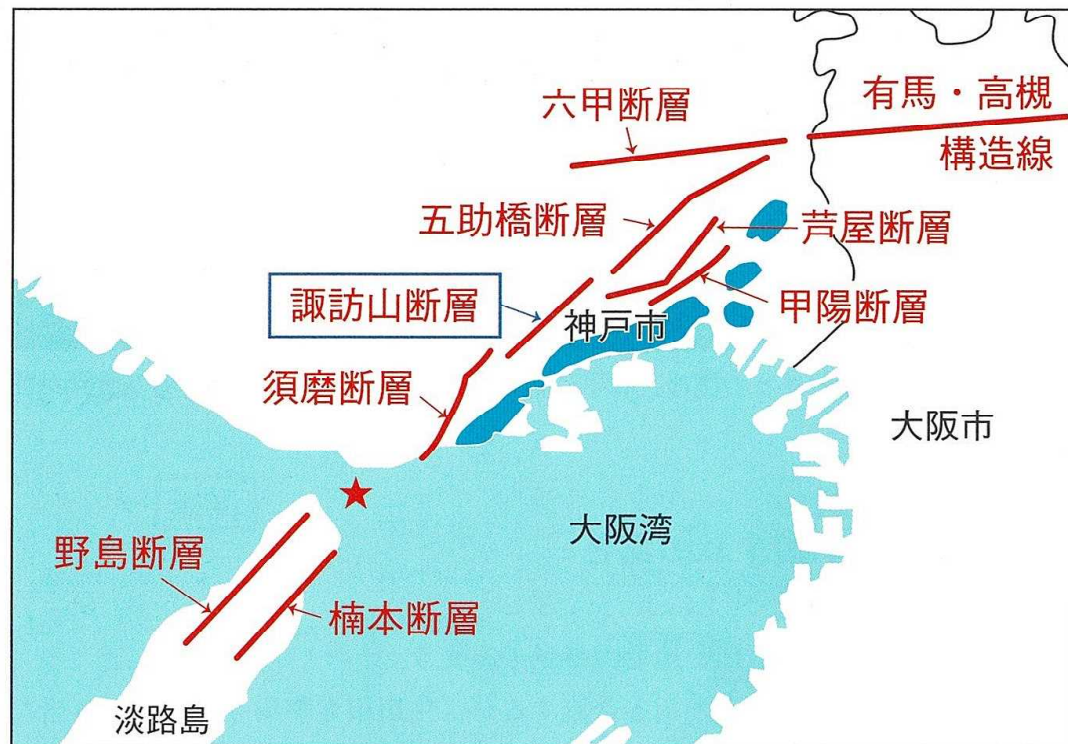


地図の赤丸部分(神戸市中央区加納町3丁目交差点)に「史跡旧生田川址」の碑が建っている。

②諏訪山断層 新神戸駅の山手には、急な傾斜地が接している。諏訪山活断層の断層崖である。地理院地図の航空写真でもはっきり確認できる。地図の中央の白の細長い構造物が新神戸駅のホーム。従来から地形的に断層の存在は推定されていたが、山陽新幹線六甲トンネル掘削時にその存在が確認された。新神戸駅は断層上に建つことを前提に設計され、1995年の阪神大震災の大きな被害は免れている。



◆阪神・淡路大震災（兵庫県南部地震）と周辺断層



▲ 神戸・阪神間の断層系。★印は兵庫県南部地震の震央、青い部分は「震災の帯」と呼ばれる震度7、建物の全壊率30%以上だった部分。

1995年1月17日、阪神・淡路大震災（兵庫県南部地震）が発生した。これは諏訪山断層の園長付近が震源で、マグニチュード7.2、「震度7」が始めて提供された大地震であった。しかし、余震の震源分布を見てみると、諏訪山断層に連なる断層系付近で多く発生しているものの、大きな被害は断層上ではなく、むしろそれに平行する海側の地盤の弱い地点などに集中した。

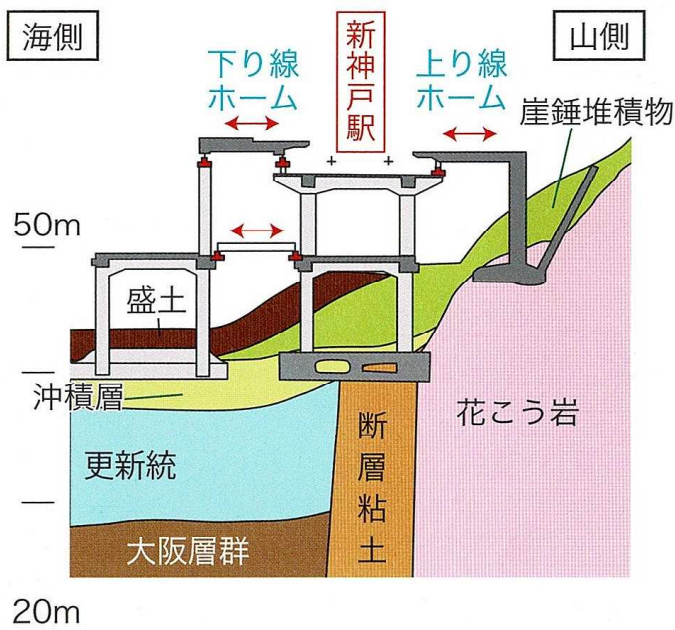
この地震により六甲山系は【訳】20cm上昇したが、国土地理院のGPS観測で分かっている。この地震で諏訪山断層の西側の山地は上昇し、東側の低地はさらに5cm下降した。

こうした活動は、六甲変動とよばれる地殻変動で、約100万年前から始まっている。100万年前のうちに何度か同様の上昇運動を経て、現在の六甲山系など、大阪湾を取り囲む山地が形成された。

←断層粘土の部分が諏訪山断層

◆新神戸駅の断面図

山陽新幹線の新大阪駅を出てしばらくすると、六甲山を貫通する六甲トンネル（約16km）に入る。長いそのトンネルを出たところに新神戸駅があり、その先はまた長い神戸トンネル（約8km）となる。新神戸駅はこれら2つのトンネルの間のわずかなスペースに作られたのだが、何とこの駅下を諏訪山断層が通過している。（中略）そのためこの駅には、もし断層が活動しても（地震が起こっても）駅舎が破壊しないよう工夫が凝らされている。断層は上り線と下り線の間を通るため、各ホームと路盤の3つの基礎をそれぞれ別にし、また隣の基礎との間にある程度遊びを設けることで、仮に断層で横ずれなどが生じてても、建物への被害が少なくなるように設計されている。（このページの文と絵は、芝山元彦著『3D地形図で歩く日本の活断層』・創元社）による。



③砂橋 (ごさいばし)

「布引の滝」には広義と狭義がある。広い意味では、生田川中流域(布引溪)にたかる「雄たき、めんどき、鼓、滝、めんどき、滝、雌滝」の4つの滝の総称。狭い意味では最も大きい「男滝」をいう。

この中流域に明治33

年(1900年)神戸市の近代水道施設が作られた。

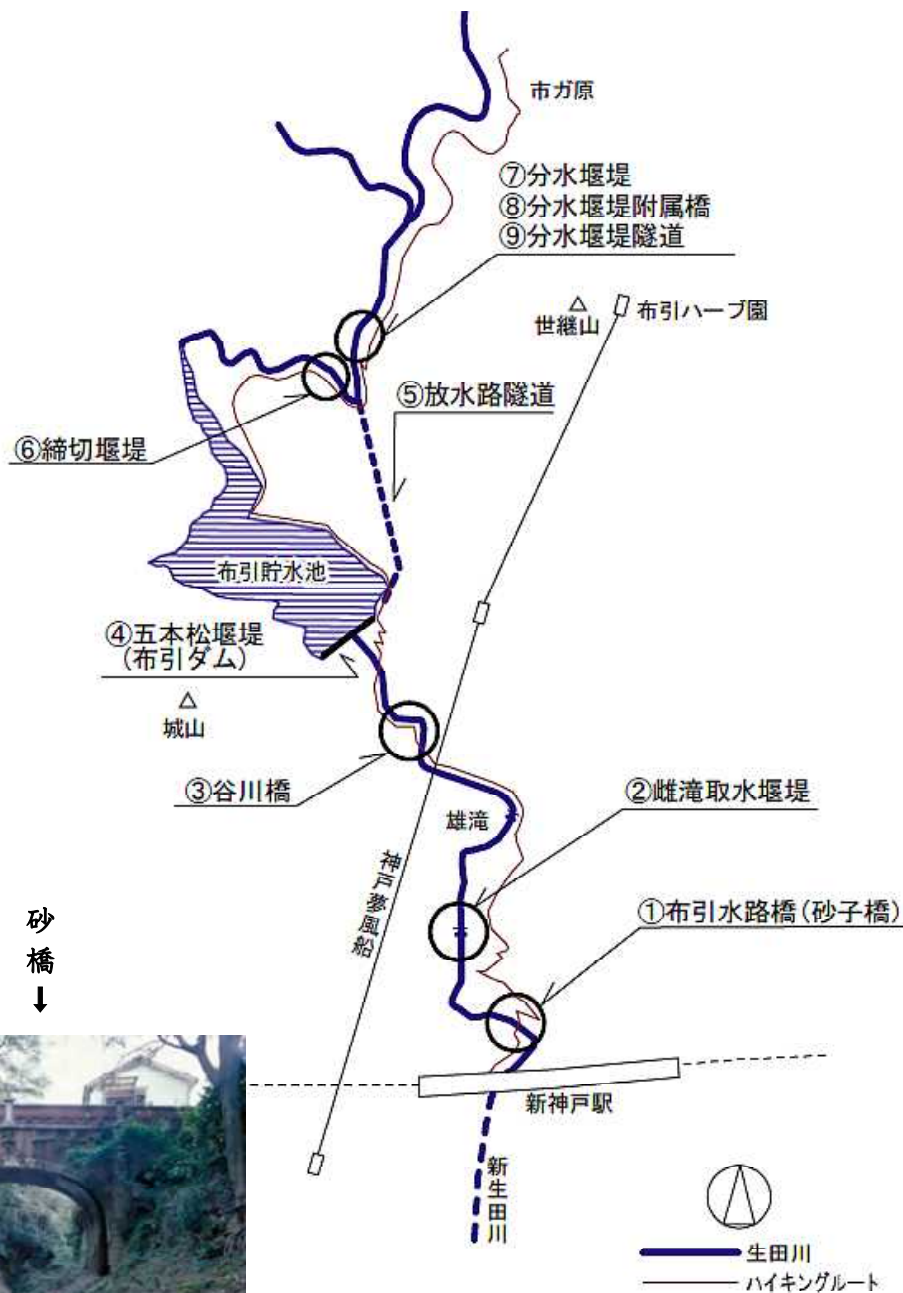
多くの施設(地図の①～

⑨)が現役で平成18年

(2006年)に重要文化財に指定された。



→ 摂津名所図会 巻第11「布引男滝と砂いさごやま山」



砂橋↓



砂橋もその一つ。全長19・2m。溪流の左岸で取水された水を右岸の北野・奥平野浄水場へ送る8インチ導水管を渡すために建設された現役の石造アーチ橋。砂山(現在は丸山の麓にある所からの名。「いさご山」は、布引の滝が登場する伊勢物語第87段の「いさ、この山の上にかみ」といふ布引の滝見に登らん」(さあ、こ

の山の上にあると聞く布引の滝を見に登ろう」という部分の「いぎ、この山」を「いぎの山(砂の山)」と読む中世の(現在は認められていない)解釈から定着したもの。

④雌滝と取水施設

雌滝は高さ19m。すぐ下流の取水堰堤や取水井屋が重要文化財となっている。

布引雌滝(上)↓

取水井屋(下)↓



⑤鼓滝(鼓ヶ滝) 高さ8m。

⑥夫婦滝 高さ9m。手前の橋からすぐ上流部の雄滝と一緒に眺めることが出来る。



→ 鼓滝

↑ 夫婦滝

⑦雄滝 高さ43m。伊勢物語で、芦屋にゆかりのある在原業平とその兄の行平一行が訪ねて歌を詠んでいることから後世名所となり多くの作品で取り上げられた。



参考 伊勢物語 第八十七段

【本文】むかし、男、津の国、菟原の郷、芦屋の里に、しるよしして、行きて住みけり。昔の歌にとよみけるぞ、この里をよみける。ここをなむ、芦屋の灘とはいひける。この男、なま宮仕へしければ、それを便りにて、衛府の佐ども、集まり来にけり。この男の兄も、衛府の督なりけり。その家の前の海のほとりにあそびありきて、「いぎ、この山のかみにありといふ布引の滝見に登らん」と言ひて、登りて見るに、その滝、物よりことなり。長さ二十丈、広き五丈ばかりなる石のおもて、白絹に岩を

包めらんやうになむありける。さる滝の^{かみ}上に、円座の大ききして、さしいでたる石あり。その石の上に走りかかる水は、小柑子・栗の大ききにてこぼれ落つ。そこなる人に、みな、滝の歌よます。かの衛府の督、まづよむ。

わが世をば今日か明日かと待つかひの 涙の滝といづれ高けん
ある主、次によむ。

ぬきみだる人こそあるらし白玉の 間なくも散るか袖のせばきに
とよめりければ、かたへの人笑ふことにやありけん、この歌にめでて、やみにけり。

帰り来る道遠くて、うせにし宮内卿もちよしが家の前来るに、日暮れぬ。宿りの方を見やれば、海人（あま）のいさり火おほく見ゆるに、かあるじの男よむ。

晴るる夜の星か河辺の螢かも わが住む方の海人のたく火か
とよみて、家に帰り来ぬ。

その夜、雨の風ふきて、浪いと高し。つとめて、その家の女^{めのこ}ども出でて、浮海松の、波に寄せられたる、拾ひて、家の内にもて来ぬ。女^{をんながた}方より、その海松を高^{たかつき}坏に盛りて、柏を覆ひて出だしたる、柏に書けり。

わたつみのかざしにさすといはふ藻も 君がためには惜しまざりけり
田舎人の歌にては、あまれりや、たらずや。

【訳】 昔、男が、摂津の国、菟原の郡の芦屋の里に所領がある縁で、そこに行つて住んだ。昔の歌に、

芦屋の灘の塩を焼いて暇がないので、黄楊の小櫛もささずに来てしまいましたよ

と詠じたのは、この里を詠んだのである。ここを芦屋の灘と言った。この男は、さしたる地位でもない宮廷勤めをしていたので、それを縁にして、衛府の佐たちが集つてきた。この男の兄も衛府の督であつた。その、男の家の前の海辺をあちこち遊覧してまわつて、「さあ、この山の上にあるという布引の滝を見に登りましょう」と言つて、登つて見ると、その滝はふつうの滝とは異なつてゐる。長さ二十丈、広さ五丈ほどの石の表面、そこにまるで白絹に岩をつつんだような光景で水が流れ落ちていた。そんな滝の上の方に、円座ほどの大ききで、差し出た石がある。その石の上いきおいよく流れそそぐ水は、小柑子、栗ほどの水玉となつて、飛び散り落下する。そこにゐる人に残らず、滝の歌を詠ませる。あの衛府の督が、まず詠む。

私の得意の時が、今日来るか明日来るかと待つそのかいもなく流れ落ちる涙の滝と、この滝と、
どちらが高いことであらう

主人の男が、次に詠む。

滝の上の方で、緒を引きぬくことをして、つらねてある白玉を乱し流している人がゐるらしい。

なんと白玉が絶え間なく散ることか、それを受ける私の袖は狭いの

と詠んだので、側にいた人は、衛府の督の歌が場違いと笑つていたのか、主人の歌の歌を褒めることで自分たちの歌を詠むことはやめてしまった。

帰つてくる道が遠くて、いまは亡き宮内卿もちよしの家の前を来るころに、日は暮れてしまった。

一行が泊る男の家の方を見やると、海人の漁火が多く見えるので、例の主人の男が歌を詠む。

これはまあ、晴れている夜空の星だらうか、河辺の螢だらうか、あるいは、私の住む家のあたりで海人がたく火だらうか

と詠んで、家に帰つてきた。その夜、南の風が吹いて、浪がたいそう高い。翌早朝、その家に仕える女たちが出て、浮んでゐる海松が浪に打ち寄せられたのを拾つて、家の内に持つてきた。女側から、その海松を高坏に盛つて、柏の葉をおおつて差し出したが、その柏の葉にこう書いてあつた。

海の神様が、髪飾りにするということで大切になさるこの海藻も、あなた様のためには、このとおり惜しまず打ち寄せて、おさずけくださいました

田舎の人の歌としては、十分な出来だらうか、まだまだというところだらうか。

⑧谷川橋 大正初期（大正5年以前）竣工。鉄筋コンクリートアーチ橋。橋長6.1 m、幅2.0 m（通路幅員1.8 m）。

⑨五本松堰堤（布引ダム） 水道専用としてはわが国初の重力式粗石コンクリート積ダム。堰堤高33.33 m、堰堤頂長 $\approx$ 1103 m、有効貯水容量は759,689 立方 m。

五本松堰堤↓

⑩布引三十六歌碑

明治のはじめ頃、花園社という市民団体が、布引の滝の周辺を布引遊園地として、平安時代から江戸時代にかけての布引の滝を詠んだ名歌を選び碑を建てたもの。新神戸駅からはじまる布引溪流の散策路に点在している。

歌一覧

- 1 布引の滝の白糸夏来れば 絶えずそ人の山路たづぬる（藤原定家）
 - 2 あしのやの砂子の山のみなかみを のぼりて見れば布引の滝（藤原基家）
 - 3 布引の滝の白糸わくらばに 訪ひ来る人も幾代経ぬらむ（藤原行能）
 - 4 津の国の生田の川の水上は今こそ見つれ布引の滝（藤原基隆）
 - 5 水の色ただ白雪と見ゆるかなたれ晒しけむ布引の滝（源顕房）
 - 6 音にのみ聞きしはことの数ならで 名よりも高き布引の滝（藤原良清）
 - 7 さらしけむ甲斐もあるかな山姫の たづねて来つる布引の滝（藤原師実）
 - 8 山人の衣なるらし白妙の 月に晒せる布引の滝（藤原良経）
 - 9 山姫の嶺の 梢にひきかけて 晒せる布や滝の白波（源俊賴）
 - 10 幾世とも知られぬものは白雲の 上より落つる布引の滝（藤原家隆）
 - 11 いかなれや雲間も見えぬ五月雨に さらし添ふらむ布引の滝（藤原俊成）
 - 12 岩ばしる音は氷にとざされて 松風おつる布引の滝（寂蓮法師）
 - 13 白雲とよそに見つれで足 曳の 山もとどに落つる滝津瀬（源経信）
 - 14 水上の空に見ゆれば白雲の 立つにまがへる布引の滝（藤原師通）
 - 15 呉竹の夜の間に雨の洗ひ干して 朝日に晒す布引の滝（西園寺実氏）
 - 16 うちへて晒す日もなし布引の 滝の白糸さみだれの頃（藤原為忠）
 - 17 水上は霧たちこめて見えねども 音ぞ空なる布引の滝（高階為家）
 - 18 水上はいづこなるらむ白雲の 中より落つる布引の滝（藤原輔親）
 - 19 岩間より落ち来る滝の白糸は 必ずばで見ても涼しかりけり（藤原盛方）
 - 20 松の音琴に調ぶる山風は 滝の糸をやすけて弾くらむ（紀貫之）
 - 21 たち縫はぬ紅葉の衣そめ出でて 何山 姫の布引の滝（順徳院）
 - 22 ぬきみだる人こそあるらし白玉の 間なくも散るか袖の狭きに（在原業平）
 - 23 我世をば今日か明日かと待つ甲斐の 涙の滝といづ高けむ（在原行平）
 - 23 別 こきちらす滝の白玉拾ひおきて 世のうきときの涙にぞ借る（在原行平）
 - 24 雲井よりつらぬきかくる白玉を たれ布引の滝といひけむ（藤原隆季）
 - 25 久かたの天つ乙女の夏 衣 雲井にさらす布引の滝（藤原有家）
 - 26 布引の滝見てけふの日は暮れぬ 一夜 宿貸せみねのささ竹（澄覚法親王）
- 布引のたきつせかけて難波津や 梅が香おくる春の浦風（澄覚法親王）



- 27 たち縫はぬ^{きぬ}衣着し人もなきものを何^{なに}山^{やま}姫の衣^{ひめ} 晒^{きぬ}すらむ (伊勢)
 - 28 ぬしなくて晒せる布を棚^{たな}ばたに 我あが心とやけふは貸^かさまし (橘長盛)
 - 29 雲かすみたてぬきにして山姫の 織りて晒せる布引の滝 (加藤枝直)
 - 30 主なしと誰かいひけむおりたちて 来て見る人の布引の滝 (小沢蘆庵)
 - 31 くりかえし見てこそ行かめ山姫の とる手ひまなき滝の白糸 (鈴木重嶺)
 - 32 布引の滝のたきつ瀬音にきく 山のいはほを今日見つるかも (賀茂真淵)
 - 33 たち縫ぬ絹にしあれど旅人の まづきて見るや布引の滝 (賀茂季鷹)
 - 33 別 分け入りし生田のをの柄もここに くちしや果てむ布引の滝 (賀茂季鷹)
 - 34 布引の滝の白糸うちはへて たれ山^{ひとよ}風にかけて干すらむ (後鳥羽院)
 - 35 蛭とぶあしやの浦のあまのたく 一夜も晴れぬ五月雨の空 (後鳥羽院)
 - 36 世と共にこや山姫の晒すなる 白玉われぬ布引の滝 (藤原公実)
 - 36 たちかへり生田の森の幾^{いくたひ}度^{たび}も 見るとも飽かじ布引の滝 (源 雅実)
 - 番外 1 千代^{ちよ}かけて雄^{をたきめ}滝女^{たきめ} 滝の結ばれし つきぬ流れを布引の川 (作者不詳)
 - 番外 2 三十六の碑に響きけり山姫の 織るや妙^{たへ}なる布引の滝 (太田錦里)
- 句碑 涼しさや嶋へかたぶく夕日かげ (布引坊)

⑪竹中大工道具館 〒651-0056 神戸市中央区熊内町7-5-1 TEL 078-242-0216 FAX 078-241-4713
 建設のコンセプト(竹中大工道具館ホームページ https://www.dougukan.jp/about_us より)

大工道具は、品質のよいものほど摩耗するまで使われ、消滅するという厳しい宿命をもっています。また、戦後の高度成長を経て機械製材と電動工具が広まり、今日ではテクノロジーの発達とともに、手道具を使う職人は急激に少なくなってきました。

消えてゆく大工道具を民族遺産として収集・保存し、さらに研究・展示を通じて後世に伝えていくことを目的に、1984年、神戸市中山手に設立されたのが日本で唯一の大工道具の博物館「竹中大工道具館」です。

今日までに収集した資料は 35,000 余点に上ります。古い時代の優れた道具を保存することはさることながら、「道具」を使いこなす「人」の技と知恵や心、そこから生まれる「建築」とそれを取り巻く木の文化について、様々な企画展や講演会、セミナー、出張授業、体験教室などのイベントを定期的に開催してきました。

そして 2014 年秋。新神戸駅近くの竹中工務店ゆかりの地へと移転して、新たな一歩を踏み出しました。

日本はものづくりの国です。大工道具には、日本人ならではの美意識や心遣いが秘められています。ものづくりの国に生きる楽しさ、素晴らしさ。新しい気づきに満ちた道具との出会いの場となり、伝統のものづくりに新たな刺激を与えるような存在でありたいと考えます。



《帰りの寄り道》

新神戸駅2階 新神戸アントレマルシェ

新神戸駅2階(改札口階)のアントレマルシェでは代表的な神戸土産を購入できる。

- ① トーラク 「神戸プリン」
- ② 神戸風月堂 「ゴーフル」
- ③ 神戸フランチ 「神戸魔法の壺プリン」
- ④ コンディトライ神戸 「フレンチトーストラングドシヤ」
- ⑤ 観音屋 「デンマークチーズケーキ」
- ⑥ ユーハイム 「神戸レモンティーケーキ」
- ⑦ モンロワール 「リーフメモリー」
- ⑧ 風見鶏本舗 「風見鶏チーズケーキ」
- ⑨ 神戸モリーママ 「ラスク 波の魔法箱」
- ⑩ 亀井堂本家 「瓦せんべい」
- ⑪ 三宮一貫楼 「豚まん」
- ⑫ まるなか 「ひねぼん」
- ⑬ 大黒屋 「神戸牛しぐれ煮(すがた煮 しょうが風味)」
- ⑭ 伍魚福 「いかなごのくぎ煮」
- ⑮ 《苜屋》 アンリ・シャルパンティエ 「フィナンシェ」

など

